

# 被害者支援 ニュース

認定特定非営利活動法人  
全国被害者支援ネットワーク

## 第10号

2013.3.15 発行

認定特定非営利活動法人  
全国被害者支援ネットワーク  
〒113-0033 東京都文京区本郷2-14-10  
東京外国語大学本郷サテライト 6階  
TEL 03-3811-8315 FAX 03-3811-8317  
ホームページ <http://www.nnvs.org/>

- 巻頭言 ..... 東日本大震災から2年を経過した被災地での支援をめぐって 1
- 特集 ..... 認定コーディネーター制度の発足にあたって 3
- 寄稿 ..... 新時代の被害者支援への期待 5
- センター紹介 ..... 福岡犯罪被害者支援センター 6
- 用語解説 ..... 被害者の意見陳述制度 7
- 募金活動報告、寄付者、賛助者等の紹介 8

### 巻頭言

## 「東日本大震災から2年を経過した被災地での支援をめぐって ～語り継ぐことが私たちの使命～」

認定特定非営利活動法人全国被害者支援ネットワーク 副理事長  
公益社団法人みやぎ被害者支援センター 理事長  
三輪 佳久

1. 山紫水明が一瞬にしてガレキの山と化したあの悪夢の日から2年の年月が流れた。

我が子の犯罪被害に必死に向き合ってくれた母親が津波にのみこまれ帰らぬ人となっていた。また、殺人の被害で我が子を亡くし、働くことが出来なくなった母親を支え続けてきた母をこの災害で失った。

「東日本大震災」は犯罪被害者等や私たち支援者にも様々な爪痕を遺して通り過ぎていった。

2. 災害発生時からの支援は、危機介入時から実践（役務の提供）と心のケアの両輪で支援が進められてきた感がある。この活動の中の一つとして、今回は、当センター理事さとう宗幸氏（写真右）の活動が特筆されるのではと、ここに紹介することとする。

さとう理事はシンガーソングライターとして、「青葉城恋唄」のヒット曲を生むなど宮城県を拠点として活動をしている方である。

平成15年から当センターの理事として就任以来、毎年開催される犯罪被害者週間「県民のつどい」では欠かさことなくミニコンサートを行うなど、特に被害者等の心の癒しとなる歌声は好評で、いまでは被害者支援とさとう理事との関係は切っても切れない関係が続いている。

このように、さとう理事の被害者支援での活動は、当センター理事という立場を超えた「さとう宗幸氏個人」の持っている魅力、発信力により、被害者支援の活動として宮城県民に広く行き渡っているのである。「県民のつどい」でのミニコンサートを聞いて感銘を受けた、励

まされた等の感想が寄せられており、被害者支援活動でのさとう宗幸氏の貢献度は、他に比べるものがないほど素晴らしいものである。

また、さとう理事は震災発生から今日まで、ボランティアとして宮城、岩手、福島の被災県に数えきれないほど足を運び、学校や仮設住宅等を訪れ、歌とトークで被災

平成24年11月9日 犯罪被害週間・県民のつどい  
公開講演会ミニコンサート

者を元気づけている。この震災を風化させたくないという一心で歌で語り継いでいる。

なかでも震災支援ソング「花は咲く」「虹を架けよう」は全国の皆さんにぜひ聴いていただきたい歌声でもある。

3. 月日を重ねていくとややもするとあの2年前の悪夢の記憶が薄れ、忘れ去られていくのでは、と言う被災県としての心配が常に頭から離れない。

一例を挙げるならば、12月7日から13日までの1週間の総地震数は1020回にも及び、そのうち有感数も27回が記録されており、平均して1日3回～4回の揺れを体感しながら毎日生活しているのが被災県の現状である。

復興、復旧を語り継がれてきている中で、いまなお、死者・行方不明者数は、15,878人（平成24年12月12日現在）となっており、うち宮城県の死者・行方不明者の数は、10,858人で全体の68.4%を占めている。

仮設住宅等の施設で2年目を迎える被災者数は321,433人（平成24年12月16日現在）となっている。

仙台市と宮城県第2の都市石巻市を結ぶ大動脈である鉄道も、未だに線路が破壊され寸断されたままであり、復旧の目処もたない状態である。

4. 「風化は『津波被害や原発事故があったことを忘れること』と思いがちだが、『震災時に人々が考えたこと、行動したこと』を忘れてしまうことの方が問題だ。震災時には多くの人々が家族のため、近所のため、見ず知らずの人々のため、勇気を持って行動し、今までの枠にとられず解決方法を考えた。被災しなかった地域の人々も涙し、応援する気持ちを持った”（宮城大学宮原育子教授）。

これを忘れることが「風化」であり、これがあるからこそ「絆」という言葉が成立する。

新しい年は、もう一度3.11当時の自分を考え「風化」していないかを省みる必要がある。」（『内館牧子の仙台だより』から）。

自らの被災体験を持つ私たちセンター員は、役員をはじめ全員があらゆる機会を活用し、犯罪被害者の心情を訴えると共にこの震災体験を風化させないためにも私たちが参加した被災現場での微細な活動体験を語り継いでいくことが使命と感じている。

5. 時の流れは速いものである。

当センターが総力を挙げ全員が一丸となって行った支援活動の中で最も過酷な業務と言われている遺体関連業務を、ご遺族に寄り添いながら40日間継続して行った県内最大のご遺体安置所で、連日数百体のご遺体が安置されていた宮城県総合体育館「グランディ21」。それと共に設置されている宮城スタジアムが、2020年の東京オリンピックを目指す計画でサッカー競技を行う会場に予定されている。

2020年オリンピックが開催され、国民が熱狂し、全世界のサッカーファンが宮城スタジアムで歓声をあげる時代になったとき、このサッカー場の隣で行われていた過酷な震災関連業務のことは、どのように語り継がれていくのであろうか。あるいは遠い過去の記憶として時の流れの中に消え去っていくのであろうか。

2度とこのような悲惨な災害がおこらないことを切に願っている。

